

やさしい病害虫講座  
ミカン類の病害虫—I

木村 裕

夏みかんなど柑橘類の葉に煤がついたように黒く汚れているのをよく見かけます。とくに道路沿いの樹で多いようです。すす病という病気が葉や枝の上で発生したためですが、その原因は虫にあります。アブラムシやコナジラミ、カイガラムシなどが新芽や葉に寄生して汁を吸い、その排せつ物が落下して葉にたまり、その排せつ物を餌にしてすす病菌が繁殖したために黒く汚れます。それゆえ菌自身はみかんの樹に直接の悪影響は与えないのですが、葉の表面を覆い隠すため、光を遮って光合成の妨げとなる二次的な被害を与えますし、美観も悪いですね。



この排せつ物はアリさんの好物で巣にセッセと運んで行きますが、供給が多いと運びきれず葉の上に残って積みあがります。葉の表面に粘り気のある液体がいっぱい付着し、ピカピカと光るのが特徴です。このような症状が現れれば何処かに虫がいるはずですが・・・

最も大きな発生源となっているのはミカンコナジラミと称する虫さんです。しかし皆さま方の目ではなかなか見つからないでしょう。この虫は長さ1ミリくらいの円盤状の平たい虫(幼虫)で、体色が淡緑色をしておりうまく葉に溶け込んでいます。この原稿の手配写真を参考に探してください。



一方、成虫は真っ白で、小さなハエのような虫です。葉を揺るとパットと四方に飛び散りますので見つけやすいです。

成虫は葉の裏に非常に小さな白い卵(成虫の横に写っている小さな点)を点々と産み付けます。卵からふ化した小さな幼虫はウロウロと歩き回り、ここが住みやすいと決めた場所に落ち着くと、もう動き回りはしません。この段階までは皆さんの目では絶対に見つかりません。



すす病対策の基本は虫を取り除くことで、葉の裏を狙って殺虫剤を散布します。葉を揺ると白いハエ(成虫)がいっぱい飛び散るときが防除適期です。幼虫は見つけにくいし、蛹(幼虫と同じ形)に対してはあまり効果がありません。それゆえ散布1週間後に再度散布することを推奨します。

黒っぽいアブラムシが新芽に群がって宴会を開いている時もすす病は発生します。また、白色やチョコレート色をしたロウの塊(ロウムシと称するカイガラムシ)が枝に密集している時も発生しやすいです。